

新潟市潟環境研究所 第8回月例会議（概要）

日時：平成26年12月17日（水）午後3時～午後5時

場所：潟東地区公民館及び潟東歴史民俗資料館

■会議概要

1 開会

2 報告及び情報提供

「水と土の芸術祭2015」第2回プレシンポジウムについて（水と土の文化推進課）

「ハクチョウ」と潟エコツアーについて（環境政策課）

3 講義

「潟周辺での低湿地における暮らし」中島榮一 外部相談員（潟東歴史民俗資料館 館長）

【絵図・伝承】

- ・昔の越後平野の低湿地帯の様子を知る手掛かりとして、絵図や伝承があげられる。
- ・「康平図(1060年)」や「寛治図(1089年)」によると、その当時越後平野一帯が海として描写されているが、当該地域には遺跡も確認されており、後世の想像図であるとする説が有力である。しかし、旧石器時代から現代までの気候の変化をみると、今から約900年前の平安時代、温暖な気候であり、海水面が上昇していた可能性もあることから、低平な越後平野一帯が海であっても不思議ではない。
- ・「正保越後国絵図(1647年)」や「越後輿地全図(1818年)」を見ると、越後平野には多くの湖沼、潟が存在していたことがわかる。
- ・「北越奇談(1811年)」によると、潟は当時の越後平野において最大の潟であった。また、「潟湖戯写真景図(1884年)」では漁業や採集(ヒシ採り)、遊覧等の様子が描かれており、潟は当時から周辺住民にとって多くの恵みをもたらす存在であったことがうかがえる。

【越後平野の成り立ちと遺跡の分布】

- ・越後平野は、日本海側最大の面積を有する沖積平野である。この平野には微高地として、扇状地、自然堤防、海岸砂丘が分布している。越後平野の海岸部には、海岸線に平行に、弧状に連なる砂丘が発達しているが、これを新潟砂丘と呼んでいる。
- ・新潟砂丘の砂丘列は、形成時代や形状・地形から大きく3つに区別でき、内陸側から新砂丘Ⅰ・新砂丘Ⅱ・新砂丘Ⅲと呼ばれている。形成時期は、内陸側の新砂丘Ⅰが最も古く、新砂丘Ⅱ、新砂丘Ⅲの順に新しくできた砂丘となっている。
- ・新潟砂丘は、越後平野の前面に防波堤のように長く伸び、土砂の堆積をうながして平野の形成を助けた。その一方で、砂丘は加治川などの中小河川の河口をふさぎ、水が日本海へ流れる障害となった。結果、海岸平野部は常に排水不良となり、塩津潟・福島潟・潟などの湖沼が広がる広大な低湿地帯となった。
- ・低湿地が広がる海岸平野部では、砂丘が一番安全で安定した地であり、居住に適していた。そのため、砂丘地では、同じ場所で何度も繰り返して居住地に利用されている遺跡が多く発見されている。古代以降の遺跡では、低湿地の自然堤防上にも進出している。
- ・人々による土地利用は、地形形成と関係がある。遺跡は当時の人々の生活の外に、地形の形成時期に関する情報を与えてくれる存在である。

【潟と周辺における暮らし】

- ・潟はかつての西蒲原郡、信濃川下流の派川である中ノ口川と西川にはさまれた低湿地に存在した潟湖である。潟の成因については定かではないが、地震活動や、信濃川の土砂堆積によって沖積地が形成されていく過程において、最後までとり残された汽水湖であるといわれている。昭和33年～41年にかけて行われた干拓事業によって姿を消した。
- ・潟は時代によって面積が異なるが、面積約300～400haの広い湖沼である。潟とその周辺には、湿田稲作や内水面漁業など伝統的な暮らしが残り、水生植物・魚介類など低湿地帯特有の生態系が残っていた。
- ・中でも魚類はコイやフナ、サケ、ドジョウなどが豊富に採集され、簀立て(スダテ)等による漁獲方法があり、その収穫高は高い生活水準を維持できるもので、漁業組合によって管理されていた。
- ・そのほか鳥類ではハクチョウ、ヒシクイやマガモ、植物ではヨシやハス、ヒシ、ジュンサイ、クワイなどが採集されており、これらの生産物は周辺村の生業層に組み込まれていた。
- ・低湿地の環境は、水害に襲われることが多く、また、稲作の観点からみると生産力も低いため、否定的な見方をされることが多い。しかし、潟を含めた低湿地環境は資源と生業活動が多様であり、人間に多くの恩恵を与えてきたことが当時の潟周辺の様子からうかがえる。